



MEMORIES OF PRIMITIVE MAN
SEIGEN ONO AND PEARL ALEXANDER



P+C 2015 Saidera Records (except for Japan: Sony Music Japan International)
All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.



MEMORIES OF PRIMITIVE MAN

SEIGEN ONO AND PEARL ALEXANDER



Composed, Produced and Engineered by Seigen Ono
Recorded, Mixed and Mastered at Saidera Mastering, January 2013 to June 2015

Contrabass on all tracks by Pearl Alexander, except *
Guitar on "Iowa Corn Field" "Running Away" "Dinosaurs don't feel sorrow" by Seigen Ono,
Singing on tracks "BEANS" "Running Away" by Pearl Alexander. An intelligent conversation by
Pearl Alexander and Arto Lindsay, voice by Yuki Ono (Multi-ch only) on "Dinosaurs don't feel sorrow" and
"I only hope I will be delicious" recorded at Saidera Mastering studio and a soba restaurant, June 2015.
They are talking about the space, ambience, presence of a live venue,
stillness and beautiful reverberation. "Amazon Rainforest Three"
"Amazon Rainforest Four" Recorded in Manaus 2010 September by Seigen Ono

*02, 04, 08, 10, 13, Original material licensed by Saidera Records "Comme des Garçons
Seigen Ono" (1988) and "CDG REMIX SEIGEN ONO and ARTO LINDSAY" (1998), Ballet steps on
"Heel and toe" by Amanda Miller and Susan Deihim, Hi-hat on "Contra Tempo" by Naná Vasconcelos,
Electric Guitar on "Widespread Rain" and "Never Never Change" by Bill Frisell, Saxophone on
"Never Never Change" by John Zorn, Electric Guitar on "Never Never Change" by Arto Lindsay.

A&R : Motoichi Sugita (SMJ)

Art director : Tsuguya Inoue (BEANS)
design : Jun Inagaki (BEANS)
Photography (front cover) : Ryota Atarashi and Tamaki Yoshida
Photography (back cover and inner sleeve) : Kenshu Shintsubo
Stylist : Yu Sugiura (The VOICE)
Hair & Make-Up : Shinji Konishi (band/komazawa bisyo)
Notes : Eiichi Yoshimura



01- BEANS Composed by Seigen Ono

 Title inspired by our art director Mr. Tsuguya Inoue

02- SOME SPECIAL WHERE *Composed by Seigen Ono and Arto Lindsay

03- MEMORIES OF PRIMITIVE MAN Composed by Seigen Ono

04- CONTRA TEMPO *Composed by Seigen Ono and Arto Lindsay

05- IOWA CORN FIELD Composed by Seigen Ono

06- AMAZON RAINFOREST THREE *Composed by Seigen Ono

07- SAMURAI JAM Composed by Pearl Alexander and Seigen Ono

08- HEEL and TOE *Composed by Seigen Ono and Arto Lindsay

09- RUNNING AWAY Composed by Pearl Alexander and Seigen Ono

10- NEVER NEVER CHANGE *Composed by Seigen Ono and Arto Lindsay

11- DINOSAURS DON'T FEEL SORROW

 Word by Seigen Ono/Composed by Seigen Ono and Pearl Alexander

 I think food and music make people happy

 I agree that food and music make people happy, I guess

12- I ONLY HOPE I WILL BE DELICIOUS Composed by Seigen Ono

13- WIDESPREAD RAIN *Composed by Seigen Ono and Arto Lindsay

14- YES I REMEMBER YOU Composed by Seigen Ono

15- AMAZON RAINFOREST FOUR *Composed by Seigen Ono

16- YES I REMEMBER YOU REFRAIN Composed by Seigen Ono



©2010 Seigen Ono & Pearl Alexander

Thank you to all the production team and musicians. ~ Seigen Ono and Pearl Alexander.

Additional thanks to Tsuguya Inoue, Masakatsu Shimoda, Shuntaro Tanikawa, Meisa Fujishiro, Arto Lindsay, Mark Dresser, Dr. Diana Gannett, Yuka Honda (CIBO MATTO), Ryuichi Sakamoto, Noriko Sora, Koichi Makigami, Yutaka Yano (SHINCHO), Susumu Kunisaki [Sound & Recording Magazine], Junichi Konuma, Jun Miyake, Kaoru Iijima, Kyoichi Tsuzuki, Motoichi Sugita (SMJ), Eiichi Yoshimura, Cathy L. Cox, Miriam Basco, PARCO MUSEUM, Saidaera Mastering, ECLIPSE by Fujitsu Ten, KOR&, Dr. Yoshio Yamasaki (Waseda Univ.) and his team for the prototype 128fs 1bit 8ch portable recorder "VC-21WSD"

“Amazon Rainforest Three”“Amazon Rainforest Four”Recorded in Manaus 2010 September by Seigen Ono

「ええ!!! 2000年以降のアメリカ映画のサウンドトラックのような趣き。風の音と相性がいいアルバムだよ、これ。より自然体になってきたんだなあ。」

坂本龍一

「音楽家ぶたりの聴覚神経が激しく呼応し、音楽の火花を散らす。芳醇なアコースティック音と研ぎ澄まされた音響処理が大胆に交錯する。まるで、原始人の夢を描いた未来からの音楽だ。」

矢野優／「新潮」編集長

「ひろがり、と、奥。遠近感と触感。ひとの手が楽器で生み出す、瞬間、瞬間、の音の肌ざわりと。」

低い音の楽器が好きな女性、という。でも、低い音の楽器を奏する女性、がでてきたのはそんなに前からじゃない。そして、低い音の楽器を奏する女性に惹かれ、低い音をだしている楽器の女性にちょっと嫉妬じまりの共感をもっている男性が、また、いる。いろんなかたの音の粒子が舞って、ひとつのひろがりをつくり、異なった色を重ねている。ひとりの役者がつぎつぎと演じているような、寸劇のミニアクトゥール。そんな女性と男性に、微笑みをこめて。」

小沼純一

「この音楽を説明できる的確な言葉がなくて困った。音の表現力で言葉ではまったく及ばない域のものがある。魔力あふれる美しい音の世界に連れてってくれるパールに感謝したい。」

本田 田中 CIBO MATTO

「お、景色が変わったね？

予測できない旅、運命の悪戯、めくるめく逢瀬。

そんな光景が聞こえて来る音だった。」

三宅 純

「この世ではじめての生命の呼吸

滴音の驟雨を受け止める

マジカルな音楽を感じます。」

巻上公一

「暗闇を切り裂くコントラバスのフレーズに導かれ、さまざまな物音が交錯する圧巻のサウンドスカープ!」

國崎晋／Sound & Recording Magazine

「SFで、ゴシックで、ビジョンが壮大すぎて、永遠に未完の映画のサウンドトラックのようだ。」

都築響一

「(10年ぶりの新作) まだ途中なのですが、かっこいいですね!モニュメントバレーをひとりで歩きながら聴きたい感じ。」

伊呂薫

「Memories of Primitive Man / Seigen Ono and Pearl Alexander is a wonderfully recorded and highly listenable collaboration between Japanese composer/producer Seigen Ono and American bassist Pearl Alexander. A collection of 16 distinct songs and soundscapes comprised of layers of overdubbed double bass goodness, samples, percussion and some guitar. The beautifully expressive arpo, phat deep pocketed groove playing by Pearl Alexander and the tuneful and masterfully textured sonic sculpting by Seigen Ono. Some of music infers song form and known genres and groove transformed. A rewarding collection that is highly creative yet accessible.」

Mark Dresser

「Pearl Alexander has put herself at the leading edge of spontaneous music making. Her performance with GEN 311 had me thoroughly engaged as an audience. Now, in collaboration with Seigen Ono, a whole new level of music-making emerges. The elegance and originality of her performance combined with his composition and engineering expertise has produced another beautiful listening experience. Bravo!」

Dr. Diana Gannett

「It's very much Seigen's. Simplicity you can walk around in. What it must sound like to stand beside a red wood, someday. Seigen and Pearl」

Arto Lindsay

2015年の1月から2月にかけて、東京・渋谷のバルミュージアムで『大恐竜人間博』が開催された。

この博覧会は、その前年に講談社の雑誌『HUGE』に連載された企画『恐竜仮面』が基になったもの。

イラストレーターの山下昌克が作るキャンパス地の恐竜仮面をモチーフに、沖縄在住の写真家・藤代実砂が写真を撮り、詩人の谷川俊太郎がその写真作品に詩をつける。豪爽で不思議なこの連載企画は、やがて『恐竜人間』という一冊の書籍 (PARCO 出版) になり、グラフィック・デザイナーの井上朋也がアート・ディレクションを行った。

その出版を記念して、キャンパス地の恐竜仮面や骨格標本の新作も含む、これまでの作品と写真、詩のパネルが大大々に展示されたのがバルミュージアムでの『大恐竜人間博』だった。

たぐさの恐が訪れたその会場内では、不思議な音楽や音も流されていた。

太古の人間や骨格、それをまとった現代の沖縄の若手たちの写真、そこに添えられた谷川俊太郎の詩という、会場内の展示物に、妙にマッチするよう、あるいはちょっと “ひっかけり” のような違和感を覚えさせる音と音楽。

音と音楽の作者はオノ・セイゲン。音は2010年にオノ・セイゲンが南米アマゾンでフィールド・レコーディングしてきた熱帯雨林中の環境音のサウンド。音楽はオノ・セイゲンとコントラバス奏者のパール・アレキサンダーの演奏によるもの。

会場内ではこの音楽とフィールド・レコーディングの環境音は同時に再生され、独特の立体的な配置が行われたスピーカー群により、それらがときにミックスされ、ときに独立して音場を作り上げ、空気を作っていた。この場内の音楽、音楽は来場者に好評で、当初は予定になかったものの、限定50部の2枚組のCD-Rが製作されてオリジナル・サウンドトラック盤として会場で発売されて即完売。さらには会期中の1月31日には会場内でオノ・セイゲンとパール・アレキサンダーによる生演奏会も満員の観客の前で開催された。

この『大恐竜人間博』のための音楽には、もともと原型があった。2012年にパール・アレキサンダーのコントラバスだけのライブ即興演奏を聴いたオノ・セイゲンが、その音色と高音域やハーモニクスの音程感に惹かれてコントラバスだけの曲を書くことにしたのがきっかけとなり、ふたりのレコーディング・プロジェクトが始まった。

このプロジェクトは2013年1月からレコーディングが始まったが、もともとCD化は考えていなかったという、このレコーディング作品で鳴る複数のコントラバスは、2本のスピーカーで再生するのは困難で、家庭のオーディオではなく、屋外の巨大空間などで18台の大型スピーカーで再現することを想定して制作されたためだ。

2013年1月10日に (オノ・セイゲンのメンターでもある) スイス・モントルー・ジャズ・フェスティバルの創始者クロード・ノブス氏が年末にスキー事故の昏睡から亡くなり、その年のモントルー・ジャズ・フェスティバルに「Seigen Ono Plus featuring Pearl Alexander」として招聘され、クロード・ノブス氏追悼演奏が本作品の初演となり、オノ・セイゲンとパール・アレキサンダーのデュオのデビューとなった。

それからおよそ2年の歳月が流れた。

2014年12月、オノ・セイゲンは旧知の友人である山下昌克から『大恐竜人間博』のための音楽の依頼を受け、そのときに直感したのがこの不思議な展覧会には制作中のコントラバスの音と、アマゾン熱帯雨林がイメージにぴったりであることだった。

展覧会に音楽を提供するために、オノ・セイゲンが出した条件はただひとつ。

展覧会では作品を際立たせるための照明が重要のように、今回は同じく作品を生かすために音楽と音のヴォリュームを含めた音質が重要であること。よって、音響システムと音量を指定のとおりで場内に流してもらうことだった。

このようにして誕生した、ちょっと不思議な展覧会の不思議なサウンドをこのままにしておくのはもったいないという話から産まれたのが本作品だが、こここうして完成に至るまでにはまだ紆余曲折があった。

当初は会場で限定発売されたCD-Rを基本にというプランだったのだが、それにさまざまな要素が追加され、それに伴って新録音や作曲も行われ、本作は『大恐竜人間博』のサウンドトラックを母体としながらも、それを大きく超えるオノ・セイゲンとパール・アレキサンダーの新たなオリジナル作品として成長していったのである。

この作品を手にする方はもうよくご存知だがと思うが、念のためにここでオノ・セイゲンというアーティストの略歴を紹介しよう。

いまでは日本を代表するレコーディング／マスタリング・エンジニアのひとりとして名が知られるオノ・セイゲンは、たしかに1970年代後半から数々のスタジオでのレコーディング・ワークに携わってきたが、その一方で音楽家としても長く活動を続けてきた。

1984年にはソロ・アーティストとして日本国内でアルバム・デビューを果たすと、すぐに海外でも活躍をはじめ、英国でのアルバム・リリースや作曲家としての活動も始めた。

音楽家、作曲家としてのオノ・セイゲンの名前が世界的により広く知られるようになったのは、1987年からファッション・ブランド “コム・デ・ギャルソン” のショーのための音楽を手がけるようになってからだろう。この “コム・デ・ギャルソン” のための音楽で、オノ・セイゲンはかねてから知己であったアート・リンゼイやジョン・ゾーン、フレッド・プリスといった1970年代ニューヨークのパンク、ニューウェーブ・ジョンの副役とでもいような伝説のミュージシャン、プレイヤーをゲストに迎えてのコラボレーションも行った。

そんな音楽家オノ・セイゲンは1990年代に入ると前述のスイスのモントルー・ジャズ・フェスティバルなどにも招聘されるようになり、オリジナル音楽作品もポップス、ジャズ、クラシックの垣根を超えてCD作品として多数発表していた。

また並行してきて行ってきたコーディング・エンジニア、マスタリング・エンジニアとしての活動もますます盛んで、近年では本作品に賛辞を寄せている坂本龍一の一連の作品のエンジニアリング、リマスタリングも多く手がけるほか、共同で音楽的要素の強いメディア・アートの制作も行うなど、活動は本当に多岐に渡っている。

本作は、そんな多様な面を持つオノ・セイゲンらしい、一言では表現しにくいさまざまな顔つきを統合した作品集になっている。

それらの核となっているのは、前述した『大恐竜人間博』の会場で流されていた音楽と環境音。アルバム・タイトル曲や『Samurai Jam』、博覧会での谷川俊太郎の詩から題をとった『Dinosaurs don't feel sorrow』『I only hope I will be delicious』などが会場で流されていたトラックを基にした楽曲。

2ヴァージョンが収録されている『Amazon Rainforest』シリーズが同じく会場内で流れていたアマゾンの熱帯雨林採集の環境音の再構成だ。

それらに加え、本作には1980～1990年代に前述の “コム・デ・ギャルソン” のために作られた楽曲を素材として再構成した新曲群である『Some Special Where』『Contra Tempo』『Heel and toe』『Never Never Change』『Widespread Rain』も収録されている。

完全な新作としてアート・ディレクターの井上朋也がインスパイアを受け、井上朋也のデザイン事務所の名を冠した冒頭曲『BEANS』もある。

以下、いくつかの収録曲に関するオノ・セイゲンによる解説だ。

01『BEANS』03『Memories of Primitive Man』07『Samurai Jam』14『Yes I remember you』―「これらの曲は、バイオリン、チェンのように聴こえる音域も、すべての楽器に記した音で、即興もハーモニクスもコントラバスです。電子楽器やプログラミングやピッチコントロールはまったく使用していない。『Memories of Primitive Man』では、間奏から入ってくるアマゾンのサウンドと、1988年のセッションから採り家アマンダ・ミラー (ハル・エジュース) とスーザン・デイルム (ヒールでモデルウォーク) のそれぞれの足音をコラージュしています」

04-『Contra Tempo』※ ―「この曲のハイハットは、ナナ・ヴァスコンセロスによるものです」

06『Amazon Rainforest Three』15『Amazon Rainforest Four』―「この2曲の環境音は、現地の夜明け前の2時間と日没後の2時間 (マラリア蚊がする時間!) のアマゾン、マナウスの熱帯雨林で、早稲田大学のボータブル1ビットDSDレコーダーで収録した素材から、音楽トーンの合う部分を編集で構成しています」

10『Never Never Change』※ ―「この曲のサクセスはジョン・ゾーン。ギターはアート・リンゼイとビル・フリゼールが弾いています」14『Yes I remember you』―「2002年に制作した『I Probably Will Not Remember You / Seigen Ono』と対になる曲です」その他『曲目群で※印のついた曲 (02, 04, 08, 10, 13, 15) は、コントラバスのカウンターとして、インターナル的にコラージュ。1988年に川久保玲からの “誰も、まだ聴いたことがない音楽を” “洋服がきれいに見えるような音楽を” というオーダーを受けて作曲した『コムデギャルソン／オノ・セイゲン』の未発表トラックや断片、それを1998年にリミックスした『CDG REMIX / SEIGEN ONO and ARTO LINDSAY』の未発表素材から再構築し、2015年6月に新たな録音も加えて完成させました」

コメントにあるよう、博覧会のおいわば場内BGMとして作られた楽曲、熱帯雨林で採集された環境音、そしてファッション・ショーのための音楽が渾然とひとつにまとまったアルバムが本作。このような多岐に渡るルーツを持つアルバムの場合、ややもすると雑多でまとまりのない作品集のように感じられてしまいがちだが、本作を聴いた方であるならば、とてもそんな印象は抱かないだろう。

というのも、『大恐竜人間博』の音楽も、環境音も、“コム・デ・ギャルソン” の音楽のフラグメンテーション (の再構築) も、それらあくまで本作『Memories of Primitive Man』というトータルな世界を作り上げる要素としてすべて再構成されているからだ。『大恐竜人間博』をひとつの契機として、オノ・セイゲンはこの機会に1980年代後半からこれまでのオノ・セイゲンというアーティストの作り出した世界をひとつの幹のもとで再構成しようと考えたのだろう。

オノ・セイゲンという Primitive Man (原始人) が二足歩行を始め、世紀をまたぎ、ついにここに至ったという進化の過程を本作に詰め込んだといってもよい。

だから、本作は作曲家オノ・セイゲンの訪ぎず楽曲の魅力もあれば、演奏家オノ・セイゲンのギターも堪能できる。そしてもちろん、レコーディング・エンジニアのオノ・セイゲンがその力をすべて注ぎ込んだ精緻で豊かな音響としての作品が記録されており、それは当然、マスタリング・エンジニアとしてのオノ・セイゲンの目が行き届いた製品としてこうして現れている。

たとえば本作に収録された曲で、コントラバスのソロ演奏の断片が複雑に多重に重ねられる不思議な弦楽奏になっているような曲がある。それなどまさに、作曲家と演奏家とコーディング・エンジニアの視点が作品に向けて一体化されたもので、この21世紀の録音芸術における作曲や演奏が20世紀までとは決定的に異なり、Primitive Man (原始人) の二足歩行の時代からはずいぶんと遠くに来ってしまったことを実感させられる。

そうそう、ここ最近ではオノ・セイゲンはハイレゾリレーション・オーディオ (ハイレゾ) の伝道師的な顔も持ち合わせている。本作のスーパーオーディオCDサイドの音のすばらしさ、そしてオーディオ配信としてリスナーのもとにとくど各種ハイレゾ・ファイルの音の美しさとダイナミクス。原始人はいつの間にかこんな『Complex Man』になっており、本作には『Primitive Man』だったところからの楽しも豊かな記憶がたつぷりと詰まっている。だからこそ、このような作品として実になった。

そしてもうひとりの本作の主役がパール・アレキサンダーだ。

彼女は1982年にベルギーで生まれアメリカ育ち。5才の時から音や即興に興味を示し、9才からコントラバスを学び、やがて長じてミシガン大学で本作にコメントも寄せているダイアナ・ガネットに師事して現代音楽、クラシックを学んだ。在学中からクラシック音楽のレコーディング活動も行うようになり、2006年にグラミー賞を受賞した『Songs of Innocence and Experience』の録音にも参加している。2006年の夏に来日したあとは、クラシック、現代音楽、ポップ・ミュージングの音楽家たちとさまざまなセッション、即興活動を繰り返りひろげた。

確かなクラシックの素養を持ちながら、さまざまな音楽に柔軟に対応し、鋭い閃きのある演奏を行うコントラバス奏者という高い評価を獲得しているパール・アレキサンダーによって、本作が本格的なデビュー作品となった。

本作の各曲で聴けるパール・アレキサンダーのコントラバスの響きは本当に美しく、オノ・セイゲンの実験的なエディットもあり、耳を捉えて離さない。

コントラバスのみならず、途中、アート・リンゼイとの会話で声も聴くことができるのもファンは注目。

そう、本作の第三の主役とも言えるのが主に “コム・デ・ギャルソン” 関連の作品で共作曲とすばらしいギターの演奏を聴かせるアート・リンゼイ。

アメリカ生まれ、ブラジル育ちのアート・リンゼイは、1970年代後半からバンド “D.N.A.” をはじめとしたニューヨーク・パンク・シーンでの活躍でその名を知られ、その後は多くのユニットや、ソロ活動で現在も第一線で活躍中のギタリスト、シンガー、アーティストだ。パンク、ロック、ポップス、ブラジル音楽といったジャンルを軽々と超越しているところなどはオノ・セイゲンとも通じるところがあり、実際にふたりは1980年代からの盟友。

本作の制作にあたり、新たにオノ・セイゲン、パール・アレキサンダー、アート・リンゼイの三者はセッションを行い、新録音も経てそれぞれのパートが有機的に絡み合い、本作の世界に統一感を持たせている。

オノ・セイゲンのひさびさりのリリース作品となる本作は、パール・アレキサンダーという注目のパートナーと組み、そして古くからの盟友のアート・リンゼイを迎えたその豊かな果実となった。

このトライアングルの成果はこれで終りとなるのではなく、今後も継続して青々とした実を実らせていてほしいと切実に思う。

吉村 栄一 Eiichi Yoshimura Jun / 2015